

米山記念奨学生

ホームカミング講演

元米山記念奨学生
韓国清州大学校教授
安 泰榮 氏

私は、1992年から1995年まで福岡東南ロータリークラブの米山記念奨学生として皆様から面倒を見ていただいた安 泰榮と申します。

本日の、講演は、「米山記念奨学生とカウンセラー」というお話です。まず、今日のような、意味のある日に私が米山奨学生を代表して講演できることに胸がわくわくし震えるような気持ちです。先に、私が韓国にいる間、日本語をあまり使っていないく久しぶりに日本語を使うものですから間違っていないか心配になります。もし、間違いがあってもご理解をお願いします。

私は、韓国の1984年に漢陽大学電子工学科を卒業し、男性なら当然行ってこなければならぬ軍役に2年半に亘って就きました。その後、26歳になりましたが、就職せず大学院に進学し勉強をもっとしたいと思いました。韓国の大学院を卒業し、指導教授の推薦で1997年に九州大学に留学するようになりました。幸いにも韓国で学んだ論文、実績を認めてもらうことが出来ました。そして、研究生の過程を経ず博士課程に進むことが出来ました。しかし、やりたい勉強をでき嬉しかったが、日本語が下手で、学生と指導教官との話が難しかったです。韓国と生活環境が違って、初めての一年間は心配な気持ちで生活していました。家庭でも結婚して新婚の妻も友達が居なく一日中家に一人でいなければならない状況で二人とも留学生活が大変な状況でした。研究を一生懸命したせいかはわかりませんが、研究室の先生が米山記念奨学生として推薦してくれました。運が良かったかもしれませんが、米山記念奨学生として合格したという連絡を受けて本当に嬉しかったです。そして、奨学生として初めてロータリークラブ（福岡東南RC）に参加させていただくことになりました。

その時、私のカウンセラーであります・・・(涙で言葉が詰まる)小峰先生に初めてご挨拶をしました。第一印象は小さいけど元気な姿で顔は穏やかな微笑を持っていらっしゃいました。その当時、カウンセラーと奨学生の間を単純に思い、月に一回程度、例会に参加し、お会いする程度だと思っていましたし、例会でお会いすれば軽くご挨拶をするだけでおりました。妊娠した妻が留学生活のストレスだったかどうか分かりませんが、一か月程度早く出産するようになりました。三か月くらい入院して元気になった子どもと妻は退院しましたが、日本の留学生活と共に最初の赤ちゃんを迎えた私たちは、それこそ大変な毎日でした。

偶然なのかわかりませんが、カウンセラーの小峰先生の会社が私が住んでいる吉塚から歩いて10分程度の近くにあり、非常に近くにいらっしゃいました。たまたま、小峰先生と奥様が子ども用の服をプレゼントしてくれました。そのことが、私たちにとって、親が孫にプレゼントをくれるように思い心から関心を持って下さっているという事が伝わりました。ある休日でした、私の家族と小峰先生の親戚の会と一緒に出席したことがありました。志摩にある海岸でした。その日は、海にあらかじめ準備した網を引っ張る、いわゆる地引網方式で魚を捕まえました。その日捕った魚はこのしろ、アジでとてもおいしかったです。その日、小峰先生は、私達を韓国から来た息子、嫁、孫と親戚に紹介してくれました。その話を聞いて私はびっくりしました。実は、その前までは、私は小峰先生をカウンセラーとしか考えておりませんでした。しかし、その日、小峰先生が私と家族を父と息子の様と考えてくださっているという事を感じました。その日から多くの考えをするようになり、私もだんだん心を開くようになり、小峰先生を私の家族の一員として受け入れ始めたようです。ある11月初めの頃に、小峰先生の家族と私たち家族が初めて電車に乗り柳川市に行きました。その時、柳川では白秋まつりというのがあっておりました。白秋は柳川が輩出した有名な文人の北原白秋先生をたたえるための祭りであると知りました。その日、初めて行った柳川市が日本のベネチアという言葉を実感し、船頭が櫂で漕ぐ小さな船に乗って、船頭が唄う歌や話が面白く、それを聞きながら本当に美しい思い出を作ることが出来ました。このような貴重な経験をすることが出来たことも、すべて小峰先生の好意と配慮がなかったら出来なかったのです。小峰先生も会社の社長でいらっしゃいましたが、今考えるとそんなに暇ではなかったはずであるのに、貴重な時間を作ってくれました。小峰先生の息子さんとお嬢さんと一緒に集まって食事をしたり、何時でも息子の家族の様に接してくださいました。カウンセラーの小峰先生とその家族の皆様の励ましと応援により、熱心に努力することが出来その結果、1994年3月に九州大学工学部の博士号を受けることが出来ました。もちろんその間も、カウンセラーと奨学生の関係はより緊密に保たれており、多くのお世話を頂きました。九州大学を卒業してから福岡市内に本社がある正興電機に入社し古賀事業所の研究室に勤め始めました。会社は私が研究していた学校とは全く違った世界でした。会社の研究所は、学校より多くの社員がさまざまな商品を開発していて、毎日忙しく過ごしました。しかし、会社で一緒に勤めていた仲間から社長まで、皆さんが私に親切にしてくださり7年経った今でもよい関係を保っています。1997年に帰国してから韓国のチョンジュというところの大学に教授として志願して講学することが出来ました。チョンジュは韓国の真ん中あたりにありソウルから南に車で1時間ほど離れています。1997年にチョンジュ大学の電子工学科に教授に任用され現在まで16年間勤めています。韓国に帰国して娘が生まれ四人家族になりました。私が大学に任用されて後、福岡に家族旅行に行ったことがあります。その時、小峰先生が久しぶりに実の息子の家族に会うように喜んで迎えてくれました。忙しい時間を割いて市内観光案内をしてくださりました。帰国する時、空港まで見送って下さって姿が今も目に浮かびます。

すでに多くに皆さんがご存知だと思うのですが、小峰先生は2005年3月初旬にお亡くなりになりました。その当時、小峰先生の奥様が韓国にいる私に先生が亡くなったという事を電話で知らせてくださいました。その時私が久しぶりに日本語を聞いたので、その言葉をよく理解できなかった事のように感じました。電話を切って私の妻と暫く言葉を忘れて涙だけこぼしました。私の息子と共に福岡を訪れ小峰先生の弔問に伺った時、その遺影を見て初めて先生が亡くなったのだと実感しました。去年の夏に家族が福岡に来た時、私の家族と小峰先生の家族みんなで先生のお墓参りに行きました。周りが美しい・・・所でした。(涙で言葉にならない)

皆さん、今ゆっくり考えてみてください。小峰先生が私に見せたいと思っていたのは何でしょうか。経済が発達した先進国のいいものを自慢したかったわけではないでしょう。

奨学生とロータリークラブ会員の関係もなかったし、単にカウンセラーと米山奨学生の関係だけでもなかったのです。その事は人や国を超えた無償の愛と奉仕ではないでしょうか。私は小峰先生がそんなことを見せようとしてくれたのではないのかと考えています。この席を借りてもう一度、小峰先生が見せてくれた奉仕と献身について感謝致します。

そして、ご冥福をお祈り致します。これから小峰先生にお返しする道は私がもっと研究活動を熱心にして社会に役立てることだと思います。したがってこれからももっと一生懸命頑張ります。皆さん、私の下手な日本語と内容の講演を聞いていただきありがとうございました。ありがとうございました。

以 上